

今回から「仕事で一番大切にしたい 31 の言葉」という本からです

まず、儲けようとは思わない。いい計画を立て、いい建物を建てる。そうすれば、必ず社会に受け入れられ、結果として儲かるというのが基本。

(森ビル創業者 森 泰吉郎)

「企業者は私利私欲のために事業を営む極悪非道者だと説く者があるけれど、自分の知る多数の企業者は公共社会への貢献を使命と考え、新しい創造のために才能を傾けることに無上の喜びを感じている」森泰吉郎の人生に決定的な影響を与えた恩師、東京商科大学（現・一橋大学）教授、上田貞次郎の言葉がある。多感な学生だった泰吉郎は「家賃という不労所得を得ているのは世の中の寄生虫ではないのか」と真剣に悩んでいた。森家は明治時代から新橋・愛宕下で旧臼杵藩士・稲葉家の差配（貸家・貸地の管理人）を引き受けていた。泰吉郎の父親の磯次郎はなかなかの商売人で、差配の仕事の他に米屋を開業した。米屋で儲けた金で賃貸するための家を買った。米問屋への支払いを分割にしてもらい、浮いたお金で家作を増やしていった。泰吉郎が小学校に通っていたころ、森家には毎月 800 円ほどの収入があった。当時、小学校の校長の月給が 55 円ほどだったから、相当裕福な暮らし向きであった。泰吉郎は思い悩んだ。家主という不労所得を得る階級に属する自分の生活は一体何なのか。もし、当時の裕福な家庭の学生のように左翼運動に走っていたら、今日の森ビルはなかった。上田貞次郎に初めて接したとき、「目の前の霧が一気に晴れたような気がした」と泰吉郎は回想している。金持ちの大家の息子として生まれたことに引け目を感じる必要など、まったくないのである。思想的なバックボーンを手に入れたのである。1923 年（大正 12 年）9 月 1 日、東京を襲った関東大震災によって森家の家作は芝公園にあった 2 軒を残し、すべて焼失。ほとんどの資産を失った。東京商大の学生だった泰吉郎は、大学に通うかたわら、磯次郎や焼け出された店子と一緒に焼けた跡地を整理した。このとき、泰吉郎は父に、木造家屋はやめて、コンクリートのビルを建てるように進言した。火事や地震などの災害のたびに店子が住まいを失うのを防ぎたい。丈夫できれいなビルを建てれば街全体が栄えて多くの人が集まってくる。「企業者は公共社会への貢献を使命とすべし」と説いた上田貞次郎の思想に感化された泰吉郎なりの解答がこれだった。泰吉郎のビジネスの手法は、最大利潤を追求することではなかった。「公共社会への貢献を使命と考え、新しい創造のために才能を傾けることに無上の喜びを感じる」企業者本来の姿勢は、いささかも揺らぐことはなかった。あまたの不動産業者がバブル期に土地を買い漁るなか、泰吉郎は余計な土地は一切買わなかった。バブルに浮かれて土地を買い漁るのは理念に反する所業だった。不動産デベロッパーの使命とは「よいビルを建て、美しい街並み、空間をつくること」だ。この経営理念の到達点が虎ノ門「アークヒルズ」だった。最初の地上げから完成まで 17 年の歳月を要したビルである。東京のど真ん中に住居と文化生活とビジネスを兼ね備えた街を創り出した。果たしてもものになるかどうかさえわからないアークヒルズのような、息の長い事業にも、思い切って借金をして計画を遂行する大胆さを持っていた。デベロッパーの心得を問われた泰吉郎は、こう答えている。「まず、儲けようとは思わない。いい計画を立て、いい建物を建てる。そうすれば、必ず社会に受け入れられ、結果として儲かるというのが基本」敬虔なクリスチャンでもあった泰吉郎の座右の銘は聖書の「ローマ人への手紙」である。その一節をアークヒルズの中庭の石碑に刻み込んだ。「然のみならず、患難をも喜ぶ。その患難は忍耐を生じ、練達を生じ。練達は希望を生ずと知ればなり」。アークヒルズのアーク（ARK）とは方舟のことである。

森氏は不動産デベロッパーの心得を問われて何と答えていますか？

()

アークヒルズのアークとは何のことですか

()